

統合医療を支える新たな看護学の構築と国際化への展望

種池 禮子

明治国際医療大学 看護学部長

日本の看護界においては、1990年代頃より癌患者や高齢者等を対象としてComplementary Alternative Medicine（補完代替医療、以下、CAM）、つまり、補完代替医療を導入した看護療法が実践研究されてきたが、CAMを系統立てて教育・研究・実践しているところは少なく、看護学の中に確立するまでに至っていないのが現状である。そのような状況の中で、CAMを教育・研究の柱の一つにしている本学看護学部への期待は大きい。さらに、本学においては広い概念である統合医療の確立に向けた取り組みが始まっており、それを支える新たな看護学の構築が緊急課題となっている。

そこで、本学看護学部においては、現在、国内外のCAMや統合医療に関する看護研究を集積するとともに、欧米の看護系大学との共同研究や学術交流協定についても視野に入れた準備を進めているところである。具体的には、欧米の看護系大学と共同研究や学術交流を図ることによってエビデンスを明らかにし、その強みを生かした我が国特有の統合医療を支える新たな看護学の構築を目指し、世界への発信拠点としていきたいと考えている。本学看護学部はまだ、開設4年目であるが、その取り組みと展望について述べる。

I. 昨今の医療を取り巻く社会の状況

近年、後期高齢者、悪性疾患（癌）、慢性疾患などの増加や病状の重症化に伴い疾患の治癒・症状コントロールが困難になってきている。それと共に、医療費の高騰や在院日数の短縮化により在宅療養を余儀なくされるため、患者や家族の負担が増大している。これらを契機とし、社会全体が医療に求める期待が大きくなり、発想の転換として統合医療の推進が求められるようになってきた。

看護においても、現在行われている医療に対する発想の転換が迫られてきていることを鑑み、それらに対応するため、①看護師の教育水準を上げるため

の看護基礎教育の大学化、②質の高い看護を提供するための医療機関における7:1体制、③現代西洋医学に加え、Complementary Alternative Therapies（補完代替療法、以下、CAT）への教育・研究の発展と臨床への応用、などが推進される。今後、統合医療を支える看護独自の取り組みと役割を明確化していくことが、看護の質を向上し安心できる医療・看護を提供することにつながると考える。

II. 看護学と統合医療

統合医療とは、現代西洋医学と補完代替医療を単に融合させたものではなく、根底にあるものの見方（哲学）や考え方、そして患者と医療者との関係性の構築などが重要な要素であり、これらを対象個々に合わせてうまく調整された医療であるといえる（山本竜隆；統合医療とCAM）。

従来、看護学は、西洋医学をベースとして学んできたが、看護師らが行う日々の看護実践のなかには、CAM/CATの思想や方法など看護との共通性が多く、その原理を受け入れる基礎は十分備わっている。なぜなら、統合医療の根底にある患者中心、自然治癒力、全人的医療の考え方、そして、治療のみならず予防や個別性の重要性なども、ナイチンゲールに始まる自然治癒力への働きかけをはじめとする看護学の概念と一致するところが多いからである。

しかし、CAM/CATは、現代西洋医学のように科学に基づいた医療というよりも、患者の苦痛や不安に対して今までの経験に基づいて対処することが多い。今後、看護学は今まで学んできた「最先端の科学技術と確かな根拠に基づく現代西洋医学」をベースにししながら、未だ、研究・理論化されないままに看護実践に導入してきたCAM/CATの内容を精選し、エビデンスを明確化しながら新たな看護学構築に取り組んでいかなければならない。そして、看護学教育の高等教育化の進展と併せて、統合医療における看護学の役割を明らかにしていく必要があると考える。

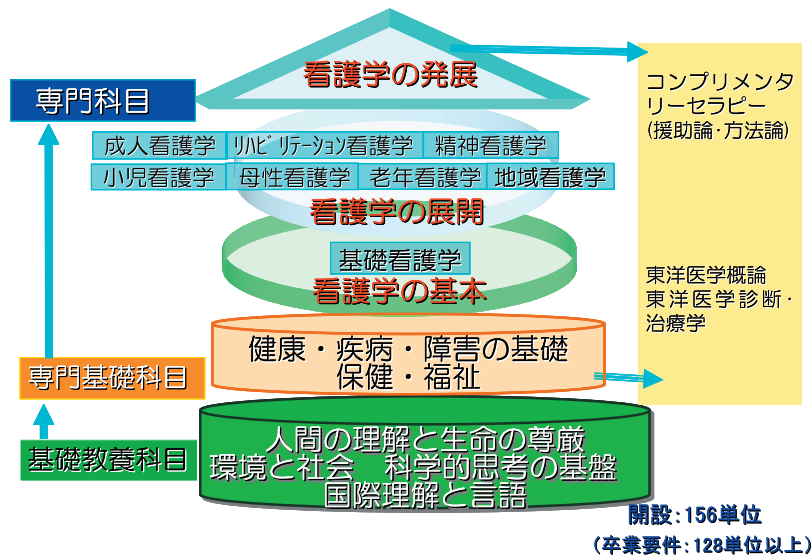


図1 教育目標と連携したカリキュラム構成

III. 看護基礎教育と本学看護学部の特徴

1. 看護学部の目指す教育と特色

本学看護学部の目指す教育は、看護学の中に東洋医学の理論・知識を取り込むことで看護の対象を全人的にとらえ、看護実践に必要なアプローチの幅を広げることにより、看護の対象のニーズに沿った、これからの時代に必要な看護の専門職を育成するための専門教育を行うことである。その特色としては、①人間性への深い洞察と倫理観の育成、②専門職としての高度な看護実践能力の育成、③東洋医学の理念を看護学に導入、④生涯教育の推進と地域社会への貢献、⑤国際交流の推進、⑥充実した学習環境と豊富で経験豊かな教授陣による教育の6項目をあげている。

2. 教育目標と連携したカリキュラム構成 (図1)

教育目標のひとつである「東西両医学それぞれの理念を看護学に取り込み看護の対象のニーズにそった、より幅広い奥行きのある看護実践能力を養う」ために本学特有の科目として、『専門基礎科目』のなかに「東洋医学概論」と「東洋医学診断・治療学」を、専門科目の『看護学の発展』のなかに、「コンプリメンタリーセラピー援助論と方法論」を開講している。このようなCAM/CATの内容は、一部の看護大学が単発科目として実施しているのみで本学看護学部のように東洋医学の概論から入り、1年生から4年生にかけて理論・実践と系統だったカリキュラム構成は他に見あたらない。これらの内容を学ぶことにより、東洋医学的な人の見方・考え方や

看護独自の働きかけを通して、人に優しく回復過程を力強く支援できる実践能力を養うことができると考えている。

3. 生涯教育の推進と地域貢献

人をケアする看護専門職としての生涯教育と地域貢献の一環として、看護学部開設年度からCAM/CATについて次のような取り組みを行ってきた。参加希望者が多く評価も高い。さらに本学の卒業生に対しての期待が寄せられている。

(1) 看護学部講演会・シンポジウム

- ① 2006年：東西医学の融合の流れと看護学の新たな可能性
- ② 2007年：看護にいかす補完代替療法の魅力
- ③ 2008年：これからの看護－統合医療を支える補完代替療法と看護－
- ④ 2009年予定：－看護実践の場で活かす補完代替療法－看護独自の新たな挑戦

IV. 本学看護学部の役割と新たな看護学の構築

CAM/CATを教育の柱の一つにしている本学看護学部への期待は今後、さらに大きくなると考える。これから看護学部が果たすべき役割は、①健康に対する人々の満足度を高めるために、看護の質を向上させ、進歩する現代西洋医学における専門分野の教育・研究への取り組みと同時に②CAM/CATのエビデンスの明確化、そして世界を視野に入れた統合医療を支える新たな看護学を構築することである。そのためには、図2に示すように看護学教育におけ

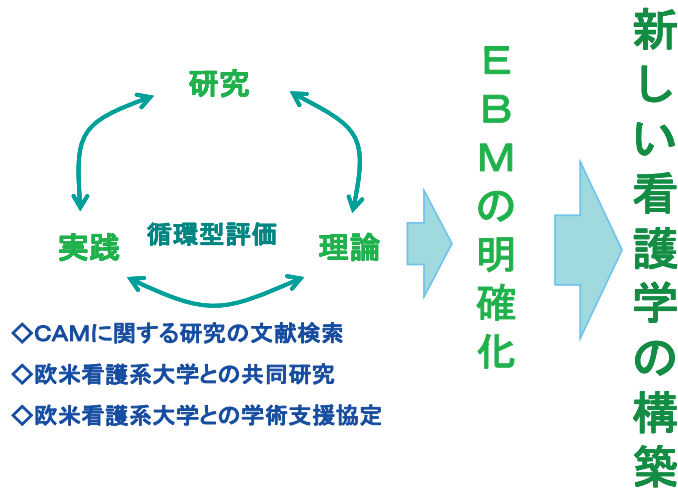


図2 CAM/CATにおける看護学教育の循環型評価

本学が目指す国際化

- 海外から迎え入れが自然に出来るような学風作り
 - 看護学各分野および補完・代替療法の国際化
 - 学術交流協定を締結することにより、学術の交流を学生・教員双方のレベルで推進し、研究・教育活動が国際的に発展、交流する機会が増えることを目指す
 - 個々の研究者が、海外の研究者との普遍的な交流
- 国際レベルでの教育・研究の交流**

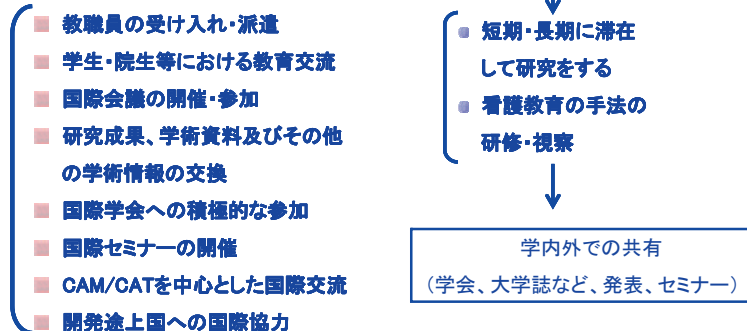


図3 本学が目指す国際化

る循環型評価に重点をおき、理論・研究・実践が円滑に循環するための創意工夫が必要となる。具体的には、CAM/CATの先行研究の検索とレビュー、欧米看護系大学との共同研究、欧米看護系大学との学術支援協定などがあげられる。これらはまだ一例にすぎないが、CAM/CATのエビデンスの明確化、国際的視点を持った看護学の展開に役立てることができると考える。

本学看護学部では、昨年度より統合医療推進研究や科学研究補助金を受け、CAM/CATに関する課題に取り組み始めている。このように専門領域の特色をいかしたCAM/CAT研究は、将来の優れた看護実践を生み出す礎になると考えている。そして、これらを通して新しい看護学の構築が可能になると考えている。

V. 本学看護学部が目指す国際化への展望

近年、看護における国際的活動は大きな発展を見せている。具体的には国際看護師協会が主催するICN(International Council Nurses; 4年ごとに開催)大会、国際助産師連盟主催のICM(International Confederation of Midwives; 3年ごと)大会や各分野別国際学術集会(癌看護学会、緩和ケア学会、クリティカルケア学会、周手術期看護学会、老年看護学学会、家族看護学会、地域看護学会、慢性疼痛学会)等がある。具体的内容としては、これらの国際学会への参加や発表、さらには、ICN大会への学生部門としての参加、国際交流、セミナーへの参加、外国での授業参加、単位互換等を考えている。また、世界的な医療の動向を見据え、各国の文化や最高レ

ベルの医療を知り、幅広い選択肢の中から目の前の患者にあったケアを選択できる能力を養うことを目指す。それらを基盤に看護教育課程を発展させ国際的な視野を持った学生を育成する。さらに、看護における CAM/CAT の定義の明確化、海外の大学との共同研究を含めたエビデンスの構築を行い、世界へ発信していくことである。

そして、海外からの迎え入れが自然にできるような学風作りや学術交流協定を締結することにより、

図3に示すように学術の交流を学生・教員双方レベルで促進し、多様な分野で活動し、世界の看護学の発展に貢献できるようにしていきたい。

文献

川嶋みどり：看護を語ることの意味，“ナラティブに生きて”，看護の科学社，2007.